The Osaka University Library Bulletin
ISSN 0387－4400

大阪大学図書館報

Vol. 13, No.1 April 1979

目　次

○長岡半太郎先生揮毫の額「粕糟嘗勿」（糟粕をなめるなかれ）と大阪大学図書館
○国立大学等図書館間における文献複写業務取扱いの改善について
○高木耕三先生を偲んで
○教官著作寄贈図書
○本館受入参考図書
○参考業務雑感
○エルテル（Dieter Örtel）博士講演会開催
○会　議
○日　程
○人　事

長岡半太郎先生揮毫の額「粕糟嘗勿」（糟粕をなめるなかれ）と大阪大学図書館

関　集三

師走に入って、本学図書館報編集係の方が小生の部屋に見えられ、私が来春退官する前に、表題の額が、本学創立当初の医学部および理学部の両図書館にかかげられたことについて何か書き残しておけとの御依頼があった。実はこの一年余りの間に小生の眼にふれたものだけでも、昨年末の日本物理学会誌(No.10)、本年５月の「大阪大学の動き」(No.83)に印刷された本学卒業式総長式辞、８月22日の読売新聞、それに科学(岩波)11月号と４回にわたりこの言葉が引用され、或いは額の写真も掲載され世間の多くの人々の眼にも触れている。この写真の実物に多少関係した小生にその説明をせよとのことである。そこで若干、回想めくが思いつくままに以下筆をとることとした。

小生が大阪帝国大学理学部に入学した昭和10年には既にこの額が理学部三階の図書室の受付の壁に掛けられていた。しかしその内容についてそれほど深く考えなかった。その額の価値がわかるようになったのは、同年の秋、前年の昭和９年に東京帝国大学の高木貞治先生(日本の誇る世界的代数学者；故正田総長の恩師）が本学の数学教室で講演された内容が岩波書店より「過渡期の数学」と題して発行され、たまたま一年生の小生がそれを買って読んでからである。

この話については後にふれることとし、「糟粕」の意味を辞典にもとづいてしらべてみると次の通りである。1)酒のかす。転じて滋味をとりさつた不用物。精神のない遺物（岩波広辞苑）; 2)酒のしぼりかす。酒かす。「古人の…をなめる」(昔の人の作ったものの精神をくみとらず形だけをまねるにすぎない)(岩波国語辞典); 3)つまらぬもののたとえ(角川新字源)等で

ある。

これらの意を汲んで、これまでの額の解釈として、「常に創造的であれ」、「研究をやる時にくだらぬことをやるな」、「いかに万巻の書をよんでもそれは前の人の仕事のあと、いわばかすである。かすだけなめていては駄目だから、それを越えてさらに一歩を踏みだせ」、「本は酒のかすと同じように著者の知識の出がらし、本によまれるな」等々の補足解釈が印刷文字として残されている。

さて話はもとにもどり、上記の理学部に現在かかげられている額の前身は、戦時中戦火をさけるため中之島理学部の倉庫に裸のまま放り込まれる運命になった。戦後復興期になっても、理学部はもとより医学部でも約20年間その存在が全く忘れられていたのである。自分のことで恐縮であるが、私が昭和39年、理学部図書委員に選出された時、当時既に理学部の豊中地区移転がきまっており、私は新しい理学部図書室に是非この額を掲げたいと思った。その後、豊中地区に移転が完了した暁、私は理学部教授会に図り、当時の金額として約10万円を理学部より供出していただき、ほこりにまみれて汚れた額を新しく表装し直していただいた。そしてこの新しい額は、昭和41年度の大阪大学豊中図書館「利用のしかた」の表紙に写真としていただき、その年度の新入生全員にみてもらうことができた。同時に私は理学部図書室壁に計５種の絵画額をえらんで緑書房より寄付してもらつたが、それらは上記の額に向いあって今日閲覧室および事務室にかかげられている。さらに昭和44年、私が図書館長に就任したが、その翌年から本学新入生全員の図書館利用のため入学時のオリエンテーションを行う時に学生に手渡す「利用のしおり」には必ずこの額の写真を掲載していただき今日に及んでいる。したがって今日の大学院博士課程３年生にいたる大阪大学の学生全員および院生のほとんどが一度はこの写真にお目にかかつていることになる。いずれにしても、この額は大阪大学の一つのシンボル的存在としての価値をもつようになった。(1)

偉人のみが偉人の心をしる、或いは天才のみが天才を理解するということがよくいわれる。このいみで同時代の高木貞治先生（明治30年東京帝大卒; 第２回文化勲章受章者〈1940〉）が先輩の長岡半太郎先生（明治20年東京帝大卒; 第１回文化勲章受章者〈1937〉）のこの額を初めて眺められた時の感想を上述の「過渡期の数学」中の第二章「解析概論」(昭和９年11月６日講述）のはじめに書いておられるので、以下その一部を引用したい。

（前略）ぽあんかれ(2)ガドコカデ「真ナルモノ(verité)ノミガ愛スベキデアル(aimable)」トイッテイル。（中略）「真ナルモノヲ愛スベシ」トイッテモ真ナルモノスベテヲ愛スベシ」トイッタノデハナイ。ソレハ裏デアル。裏ヲ考ヘレバ知識ノ宝庫ハ又同時ニ知識ノ“ガラクタ”デアル。別ニ知識ソノモノ、真ナルモノソノモノニ決ッタ値ガアルワケデハナク、人ニ対シテデアル。別に宝ト云ウワケデワナクムシロ雑然ト倉ノ中ニ累積シテアル所謂知識ノ集合デアル。“ガラクタ”トイッテハ悪イカモシレナイガ兎ニ角非常ニ多クテ少々宝ト云フ感ジヨリ

現在ノ我々ニハ知識ハ多スギテ困ルモノダト感ジラレル。

知識カラ宝ニショウト云フニワ宝ニナルモノヲ選バナケレバナラナイ。即チ選択ノ問題ガ起ル。先日ココノ図書室ヲ見セテ貰ッタ。片隅ニ知識ノ倉庫ガギッシリ詰ツテヰル。コチラノ壁ヲ眺メルト長岡先生ノ額ガ掛ッテヰテ「勿嘗糟粕」トアル。何ト云フカ、先ヅ痛快デアル。知識ノ倉ニ這入ッテモ注意セヨト云フ危険信号ガカカゲテアル。唯集合トシテ存在スルモノニ我々ハ如何ナル態度ヲ採ルベキカガ問題デアル。何時ダッタカ1826年ト記憶シテイルガあーべる(3)ノ手紙ノ中ニ"自分ハ数学ニ於テ何ガessentialデ何ガtrivial デアルカ分ッタ。ダカラぱり(4)ニ居ナクテモヨイ。国ヘ帰リタイ」ト云フコトガ書イテアル。実際essential ト trivial トヲ区別スルノガ学問カモ知レナイ。(後略)

私はここに自分の註釈をつけようとは思はない。私は昭和10年、20才の学生の時読んだこの高木先生の文章からうけた強烈な印象とその直後、長岡先生のこの額を再び眺めた時の感動をそのままにしておきたいからである。今後の大阪大学に学ばれるすべての学生諸君にこの写真がいつまでも与えつづけられることを期待したい。そしてこの長岡先生からの"宝物"の意義を体して、大いに大阪大学のあらゆる図書館施設を利用、活用していただきたい。

(昭和53年12月28日) (理学部教授、元図書館長)

(1) 医学部でも最近もう一つの額の修復を行っているときいている。

(2) H. Poin care(1854－1912), (3) N. H. Abel(1802－18929), (4) あーべるハのーるえいの数学者。ぱりトアルノハ此文句ガ彼ノぱり留学中故郷ノ友人ニ宛テタ手紙ノ一節ダカラデアル。

国立大学等図書館間における文献複写業務取扱の改善について

はじめに

増加の一途にある学術情報と、一方では二次情報のオンラインによる情報検索手段の急速な発展により研究者の一次情報への要求の度合は益々高まることが考えられる。反面必要とする情報の確保というと、もはや個々の大学だけで対応できない状況になりつつある。したがって個々の大学図書館等に持っている情報を相互に利用し合うことにより情報要求に応えなければならないときにきている。そのための利用を促進させるためにはナショナルな総合目録等の整備充実もさることながら、相互利用にかかわる業務、とりわけ文献複写作業の手続を簡素化することもその促進をはかる意味から、大変重要なことである。長年の懸案であったこの問題について、文部省はその改善策を昨年秋全国の国立大学、国立高等専門学校間に示し、以後準備を進め昭和54年４月１日を以って実施に移すことを決定した。以下、その改善の内容を説明する。なおここに記す内容は主に文献複写を利用する研究者のためという配慮もあって、事務手続の詳細は省略する。詳細について必要であれば「国立大学等図書館間における文献複写業務取扱要領」を御覧いただくとよい。

１．複写経費の処理

新方式は、複写データ処理センター（大阪大学附属図書館内）を設け、全国の国立大学、国立高等専門学校間（以下「大学等」という。）の校費、私費の文献複写経費の収支決算を電算機によって処理し、センターで処理された結果によって文部省は各大学図書館に配賦する図書館維持費で精算するという方式である。この結果、これまでとられていた複写一件毎の決済がなくなり文献複写作業の経費の手続に係る事務が大幅に簡素化されることになる。また文献複写の入手に要する期間が短縮されることも十分期待できる。

(1) 校費の場合

研究者が文献複写を申込む手続は校費、私費ともに従来と変らない。図書館における事務処理は次のように改められる。これまでは、受付館から送られてくる納入告知書によって1件毎に支出負担行為で決済されてきた。新方式では、これを改め受付館は依頼書1枚を保管しておき、年2回（上期4月～9月、下期10月～3月）に分け指定された期日までに複写データ処理センターに送付する。センターはこのデータをもとに各大学の図書館・室別に収支計算を行い文部省に報告し、また各大学等へも通知する。

(2)　私費の場合

私費の場合は、これまで受付館から経費の請求を受け、当該額を現金書留で郵送、経費を受領してから複写物を郵送するという方法であったのを、新しい方式では、依頼館で経費を国庫歳入する方法である。そうなれば、複写物と経費通知を同時に入手することができ入手に要する期間は従来に比べはるかに短縮される。したがって依頼館となる図書館、部局図書室（部局図書室の場合はその部局の事務室）の収入官吏が文献複写経費を扱う。扱えなかったところは扱えるよう改めた。

(3)　学内における経費の処理

各国立大学等間の経費の処理は文部省の図書館維持費で精算されるが、学内ではこれまで行なわれていたと同じように4半期毎に各研究室等より当該額を図書館に振替える処理を行う。私費の場合、いったんは部局図書室の収入になるが、これも一定時期に図書館に振替えることになる。

2．依頼館、受付館について

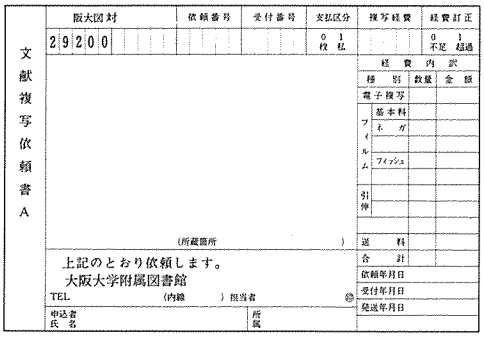
依頼館とは、他の国立大学等に対し文献複写の依頼を行う館をいう。今回の改善は国立大学等間の取扱改善であるが、ここでいう依頼館は国立大学以外の私立大学を含めた研究機関への申込も受付けることになる。

受付館とは、国立大学等その他の研究機関から複写の依頼を受付ける館をいう。これら依頼館、受付館には、データの電算処理の関係からそれぞれの図書館・室に固有のコード番号が与えられた。したがって依頼館、受付館を簡単に変更できない制約はある。大阪大学の依頼館、受付館は表1のとおりである。文献複写を申込む場合はそれぞれの所属の分館、図書室に申込まなければならない。

3．依頼書

新システムの移行に伴い依頼書（3連複写、ハガキサイズ）は図1に示すようなフォームに改められた。また、図2は申込書で、文献複写を申込だときに記入してもらう様式で大阪大学で新らたに定めたものである。

図1　依頼書様式（ハガキサイズ）


文献複写依頼書A

阪大図 対	依頼番号	受付番号	支払区分	複写経費	経費訂正
29200			0 1 校 私		0 1 不足 超過

経費内訳 種別	数量	金額
電子複写		
フィルム 基本料		
フィルム ネガ		
フィルム フィッシュ		
引伸		
送料		
合計		

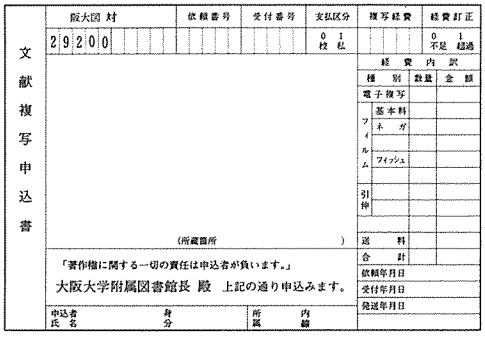
（所蔵箇所　　）

上記のとおり依頼します。
大阪大学附属図書館
TEL　　（内線　　）担当者　㊞

申込者氏名　　所属

依頼年月日
受付年月日
発送年月日

図2　申込書様式（ハガキサイズ）


文献複写申込書

阪大図 対	依頼番号	受付番号	支払区分	複写経費	経費訂正
29200			0 1 校 私		0 1 不足 超過

経費内訳 種別	数量	金額
電子複写		
フィルム 基本料		
フィルム ネガ		
フィルム フィッシュ		
引伸		
送料		
合計		

（所蔵箇所　　）

「著作権に関する一切の責任は申込者が負います。」
大阪大学附属図書館長 殿　上記の通り申込みます。

申込者氏名　　身分　　所属　　内線

依頼年月日
受付年月日
発送年月日

表1　図書館コード表（大阪大学）

図　書　館　名	略　称	図書館コード	依頼館	受付館	受付館が他大学等からの窓口となる部局等名
大阪大学	阪大				
附属図書館本館	図	29200	○	○	文学部、人間科学部、法学部、経済学部、基礎工学部、教養部、言語文化部、社会経済研究所、医療技術短期大学部
中之島分館	中分	29201	○	○	医学部、歯学部、微生物病研究所、蛋白質研究所
吹田分館	吹分	29202	○	○	工学部、産業科学研究所、溶接工学研究所、核物理研究センター、レーザー核融合研究センター、大型計算機センター
薬学部分館	薬分	29203	○	○	薬学部
人間科学部図書室	人間	29204	○		
理　学　部　〃	理	29205	○	○	理学部
基礎工学部　〃	基工	29206	○		
微生物病研究所図書室	微研	29207	○		
産業科学研究所図書室	産研	29208	○		
蛋白質研究所図書室	蛋研	29209	○		
医療技術短期大学部図書室	医短	29210	○		

あとがき

今回の改善は国立大学、国立高等専門学校間だけのものであっても、文献複写業務の抜本的改善であり、文部省の払われた努力に敬意を表わすところである。図書館は改善の精神である相互協力の重要性を理解しその推進に努めなければならない。直接文献複写を利用する教官各位においてもより理解を深めていただき、協力をお願いする次第である。また、文献複写といえば図書館という印象だけが残るようであるが必ずしもそうでなく、今回の改善で相当量の事務が軽減されたとしてもまだまだ事務局・部局事務室に負うところが大きい。相互協力は図書館活動の重要課題の一つでもありそれぞれの大学等の責任が求められるところである。

高木耕三先生を偲んで

高木耕三先生といえば、私どもに忘れられないのは解剖学の教授としての先生である。旧制高校をへて医学部に入学して最初に教えをうけたのは先生で、朗々としたお声（先生は謡を習っておられたときき、成程と思った)、ラテン語やドイツ語の正確な発音、そして消してしまうのが惜しいような、美しく画かれる黒板の図など、これが大学教授という人なのだなあと感嘆した。真面目というか、真剣というか、そういう気魄が教壇から伝わってくる思いがした。口頭試問もまさにそういうもので、われわれは一生懸命に勉強した。申訳ないことながら、あまり面白くもない解剖学をもって、医学教育の最初の関門にがつちり構えておられ、同じく解剖学の富田教授、黒津教授と並んで、何か威厳をもち`畏敬される先生であった。長い間にわたって私の知る限りでは、謹厳実直という言葉は高木先生のためのものと

いう印象であった。

研究者としての先生の領域は細胞学であったと思うが、光学顕微鏡でみて発表された細胞学的研究が、のちに発達した電子顕微鏡の何万倍という拡大で確められ、まちがいのないものであったということも第三者からきいたことがある。大正５年に府立大阪医科大学を卒業されて、大正14年に33才で教授になられ、ひたすら研究者そして教育者としての道を歩まれた。先生のクラスには、のちに阪大医学部教授になられた方が数人おられたが、先生がその初めであった。昭和30年に阪大医学部を停年退官ののちは、和歌山医大、ついで大阪歯科大学教授と、およそ50年にわたる教授職であった。その間に、黒津名誉教授、尾持信大名誉教授、山田徳大教授、藤江教授をはじめ、幾多の俊才を直接に間接に育てられ、解剖学界では長い長い間重きをなしておられた。昭和18年には、医学部長にもなられたのであるが、学究としての先生にまことにふさわしいと思うのは、大阪大学附属図書館との関係である。

まず、既存の医学部と新設の理学部とから大阪大学が昭和６年に創設され、附属図書館ができた。といっても、旧大阪医科大学図書館と病院分室、そして新設された理学部の図書室からできていて、事務室は医学部にあるというものであった。先生は、この大阪大学附属図書館の初代館長になられ、昭和６年５月から18年６月まで満12年の長期にわたっての御在職であった。その間に、工学部分室(昭和８年)、微研分室（昭和９年）そして産研分室（昭和14年）などができた。さらに、昭和24年から30年まで、医学部長の任期をおえられた先生は、二代目の理学部清水館長についで、三代目館長になられ、昭和30年阪大を御退官になるまで御在職であった。この間に、教養部分室（昭和24、25、27年）、歯学部分室(昭和26年）文学部、法経学部分館（昭和27年）などができた。こうして、先生は、前後18年間にわたり、２回も阪大附属図書館長を勤められたことになる。これは、大阪大学草創の頃であったとはいえ、おそらくこれからも破られることのないまことに大へんな記録であろう。大学における附属図書館の重要さからみて、長年月の先生の御指導は、ありがたいものであった。

家庭的には大へん恵まれた先生であった。御令息はみな医師になられ、特に御長男は有名な九大医化学の高木康敬教授で、父の名を高めておられる。御令嬢はすぐれた医師に嫁いでおられる。もともと極めて御健康な先生であったが、先年大腸疾患に罹られ、首尾よくこれを脱せられた。昨年も秋がすぎてから、肝臓腫瘍ということで御入院（女婿のおられる病院)、満87才を目前にして（明治25年３月29日のお生れ)、昭和54年１月７日御急逝になった。剖検では、胆管癌であった。

巨星墜つ、心から御冥福を祈る。

（大阪大学名誉教授　元図書館長　宮地　徹）

教官著作寄贈図書

――吹田分館――

伊藤克三（工・教授）
大学課程建築環境工学　伊藤克三他著
（オーム社　昭53）

上田　篤（工・教授）
数寄町家－文化研究　上田篤、野口美智子編　（鹿島出版会　昭53）

本館受入参考図書

（昭和54年１月～２月）

◇　総　　記　◇

Guide to reference material, Vol. 2. Ed. by A. J. Walford. 3.ed. (Library Association)

Guide to Soviet bibliographies. Ed. by

J. T. Dorosh. (Greenwood Pr.)

British Library, General catalogue of printed books. Five-year supplement 1971－1975, Vol. 1－6. (British Museum Pub.)

Union list of German language serials in libraries of the Federal Republic of Germany including Berlin (West), (GDZS). By Staatsbibliothek der Stiftung Preussischer Kulturbesitz. Abteilung Gesamtkataloge und Dokmentation.

Guinness book of records, 25th ed. Ed. by N. McWhirter. (Guinness Superlatives)

Туркмен Совет энциклопедиясы. Том 1.

Кыргыз Совет энциклопедиясы. Том 1.

Directory of european associations, 2d ed. Ed. by I. G. Anderson. (Gale Research)

Directory of British associations and associations in Ireland. Ed. by G.P. Henderson. 5th ed. (CBD Research)

◇ 哲　学 ◇

禅学大辞典　禅学大辞典編纂所編(大修館)

◇ 歴　史 ◇

日本史小百科　7、家系　(近藤出版社)

中国学芸大事典　近藤春雄著　(大修館)

幕末維新人名事典　(学芸書林)

現代日本執筆者大事典　第3巻 (日外アソシエーツ)

世界旗章大図鑑　ホイットニー・スミス著 (平凡社)

地名の語源　鏡味完二他著　(角川書店)

近畿の市街古図　原田伴彦他編(鹿島出版)

事典現代のフランス　新倉俊一他編(大修館)

An introductory bibliography for Japanese studies, Vol. 2(2), Vol. 3(1) (Japan Foundation)

The international who's who. 42nd ed. 1978－1979. (Europa Pub.)

Biographical dictionary of Japanese history. Ed. by S. Iwao (Kodansha)

A dictionary of the natural environment. By F. J. Monkhouse. (E. Arnold)

◇ 社会科学 ◇

ロシア・ソビエトハンドブック　東郷正廷他編　(三省堂)

日本政治学文献目録　No.6 (1970)～No.11 (1975)　日本政治学会編　(福村出版)

明治職官沿革表　合本1－2、6　内閣記録局編　(原書房)

大阪市区分地図集　町名公共機関要覧 '78 (国際地図)

憲法小辞典　伊藤正己他編　増補版 (有斐閣)

会社の合併ハンドブック　商事法務研究会編　(商事法務研究会)

手形法・小切手法小辞典　河本一郎編著 (中央経済社)

アメリカ商事法ハンドブック　土井輝生編 (同文館出版)

国際連盟・国際連合刊行資料目録　第4巻 国立国会図書館参考書誌部編 (国立国会図書館)

全国学校総覧　昭和54年度　文部省監修 (原書房)

図説江戸時代食生活事典　日本風俗史学会 (雄山閣)

教育学用語辞典　岩内亮一他編　(学文社)

Who's who in American law. 1st ed. (Marquis Who's Who)

International handbook of universities and other institutions of higher education. 7th ed. (Macmillan)

World list of universities, other institutions of higher education and university organizations, 1977－1978. (International Associon of Universities)

The Grants register, 1977－1979. Ed. by R. Turner. (St. James)

◇ 自然科学 ◇

科学技術政策に係わる文献調査　慶応工学

会編 (総合研究開発機構)
天文・宇宙の辞典 天文・宇宙の辞典編集委員会編 (恒星社厚生閣)
資料日本被害地震総覧 宇佐美竜夫 (東大出版会)
看護学大辞典 (メヂカルフレンド社)
伝染病予防必携 重松逸造他編 第2版 (日本公衆衛生協会)
予防接種ハンドブック (日本医事新報社)
A dictionary of microbial taxonomy. By S. T. Cowan. (Cambridge University Press)

◇ 工学・技術 ◇

公害・労災・職業病年表 飯島伸子編著 (公害対策技術同友会)

◇ 芸 術 ◇

Bibliographic guide to music, 1977. (G. K. Hall)

◇ 語 学 ◇

閩語東山島方言基礎語彙集 中嶋幹起編著 (東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所)
アメリカ新語辞典 高橋義信著 (研究社)
フランス故事ことわざ辞典 田辺貞之助編 (白水社)
Classification and index of the world's language. By C. F. Voegelin. (Elsevier)
Arte da lingoa de Iapam compostapello. Ed. by S. Shozo. (Bunka Shobo Hakubunsha)
A Turkish-English dictionary. By H.C. Hony. 2nd ed. (Clarendon Pr.)
Dictionary buying guide : a consumer guide to general English-language wordbooks in print. By K. F. Kister. (R. R. Bowker)
Rumanian-English and English-Rumanian dictionary. (Ungar)
Речник на българския език. Част. 5. Автор:Н.Геров. (Български писател)

◇ 文 学 ◇

芭蕉事典 松尾靖秋他編 (春秋社)
平家物語研究事典 市古貞次編(明治書院)
Who's who in twentieth-century literature. By M. Seymour-Smith. (McGraw-Hill)
The new Cambridge bibliography of English literature. Vol. 1−5. Ed. by G. Watson & others. (Cambridge Univ. Pr.)
Bibliographie des revues et journaux littéraires des XIXe et XXe siécles. Tom 1−3. Par J.-M. Place. (Chronique des Lettres Francaises)

参考業務雑感

私が図書館の読書相談の仕事を始めてから、早いもので一年半がすぎさった。前任の人からこのアルバイトの話を持ちかけられたとき、本の好きな私にとっては願ってもない仕事と思って二つ返事で引き受けたものの、今こうして一年半をふりかえって感想を述べる段になってみると、さて何を書いたものだろうといささか当惑気味である。

当惑の原因は何よりも利用者からの質問があまりにも少なすぎるということである。これは私たち三名の相談員共通の悩みである。私たちの仕事内容は、週二回、五時から七時まで(土曜日は1時から3時まで) 図書館3階の 参考係カウンターで 待機して、利用者からの読書や本に関する全般の質問に答えるというものだから、質問がなければ仕事にならないのである。今のところ相談員としての役割を自覚させられるような質問は月に一つもないというのが現状である。読書相談日誌に「質問なし」と記入する日の何日、いや何カ月続いたことだろう。仕方がないからいつもは本を開いて自分の勉強に専心する。こんな怠惰な勤務ぶりでも、一応アルバイトとして月々いくばくかの給料がもらえるのだから、考えてみれば有難

いような勿体ないような話である。

図書館を利用される方にお願いしたいのは、だから、ただ本を借り勉強をするだけでなく、この読書相談という他にあまり類のない重宝な制度をもつと積極的に活用して頂きたいということである——私たちの職業的良心を満足させるためにも。

読書相談という制度は他の大学図書館にもあまり類例がないようで、他大学の友人と雑談の折など、こんなアルバイトをやっているというと、一様に驚いたような羨ましそうな顔をされるのが常である。こうしたユニークな制度の存在意義は何だろうと私なりにあれこれ考えてみて一つ思いあたったのは、5時から7時までのいわゆる夜間開館の間、昼間図書館員の方々が折にふれて受け答えしている利用者からの質問を私たちが肩代わりするというものである。確かにこれまで寄せられた質問を思い返してみても、その大半は文献の所在とか検索方法、特定のテーマに関する文献の捜し方など、図書館の事情にある程度通じていれば容易に、とまではいかなくとも何とか回答の可能な技術レベルのものであった。そうした質問に対する回答もそれなりに大切である。だがこれだけでは読書相談独自の存在価値は何もないことになる。私たちが本領を発揮すべき場は、かりにあるとするなら、こうした技術レベルの問題を一歩こえたところにある、書物や読書と学問の内容とがより緊密に結びつく次元での質問——今適当な例が思いうかばないのが残念だが——にあるのではなかろうか、と私などは漠然と考えている。こうした類いの質問は問いに対する答えという単純な形でよりもたとえばカウンセリングのような双方腰を据えた対話形式によって問題点を検討するのがふさわしいだろうし、そのためには、日頃図書館事務に忙しい館員の方よりも、暇をもてあましている私たちの方がより適任だろうと思うのである。それに学問の現場に何らかの形でタッチしている私たちにとっても、そうした質問こそ本当に答えがいのあるものであることはいうまでもないだろう。

こうした質問は、実はこの仕事に就いて以来私のひそかに期待していることなのだが、今までのところこの希望は十分に満たされたとはいえない。各研究室なりゼミなりに信頼できる先輩や教師のいる学部生・大学院生の方は、あえて読書相談にまで助けを求める必要がないからかもしれない。だが教養部生、ことにこの春新しく大学に入学されたばかりの1回生の方は、しばらくはともに学問を語る相手もなく、高校までとは異なる勉強方法を前にして何かと不便をかこつこともあろうと思う。そのようなときには是非私たち読書相談員のことを思い出してほしいものである。私たちもどれだけ力になれるかわからないが、できる限りの援助は惜しまないつもりである。とくに今のように暇をもてあましている状態では、手をかけ暇をかけて懇切丁寧な回答をお約束する、と請け合ってもよい。

読書相談の制度ができてからすでに10年近くになるが、これまでは十分利用されてこなかったようである。願わくば新年度は、質問が殺到して私たちが悲鳴をあげるくらいに活用されてほしいものである。

（大学院文学研究科　大黒俊二）

エルテル(Dieter Örtel)博士講演会開催

54.2.23(金)13：30～15：30
於：法文経2番講義棟

このたび、大学図書館への助言・指導と講演のため、文部省が招聘した西独のエルテル博士が西下の機をとらえて講演会が開かれた。当日は雨にもかかわらず、約80人の西日本の大学図書館関係者が参集した。

博士は、西独研究協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft）の図書館部長で、1929

年のライプチヒ生れの法博。講演の内容は、「ドイツの大学図書館の変貌とその協力活動の発展」という題で、西独の大学の歴史と大学図書館の実態、将来の展望に関するものであった。また講演会の後、千里阪急ホテルにおいて博士を囲む懇談会が持たれ、各大学図書館長、図書館学教育者、館員等が出席、意見の交換がなされ、盛会裡に終った。

会　議

――分館長会議――

54・2・20(火)　15：00～17：30　　於　館長室

1．新分館長の紹介

最初に中之島分館長と薬学部分館長に新しく就任された岩間教授と鎌田教授の紹介が行われた。

2．本学図書館体系の見直しについて

吹田キャンパスの整備統合と関連して本学図書館の望ましいあり方について、資料をもとに種々論議が交され、現在の図書館の抱えている諸問題にも及んだ。

3．学術情報流通体制について

館長から現在学術審議会では、学術情報システムの在り方について審議されており、答申が出れば大学図書館として具体的にどう対応して行くか考える必要があると発言があり、資料「学術情報システムの在り方に関する審議経過報告」を熟読してほしいという要望があった。また、学術情報システムに関心のある図書館委員で検討小委員会を作り、これらの問題を検討してはとの意見が出て種々論議が交された。

日　程

54．1．18.　昭和54年度国立大学附属図書館協議会第26回総会事務打合せ会議(中之島分館)

54．1．22.　近畿地区国公立大学図書館協議会　53年度第4回図書館業務の機械化に関する委員会　(大阪府立大学図書館)

54．2．1.　国立大学図書館協議会　53年度第3回常務理事会　(東京大学附属図書館)

54．2．1.　昭和54年度第2回国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会　(東京大学附属図書館)

54．2．16.　近畿地区国公立大学図書館協議会　53年度第3回図書館(学)関係文献に関する調査委員会　(神戸市外国語大学本部)

54．2．20.　分館長会議　(館長室)

人　事

来訪者

54．1．17.　永久昭二（鹿児島大学附属図書館閲覧課長）外1名

54．1．30.　松本隆一（神戸大学附属図書館長）外1名

54．2．23.　エルテル博士（西独研究協会学術図書館部長）外2名

54．3．1.　原　博（滋賀医科大学図書課長）

54．3．2.　鈴木正武（京都大学附属図書館事務部長）

大阪大学図書館報　Vol. 13, No.1 通巻54号　昭和54年4月1日発行（隔月刊）
発行所　大阪大学附属図書館　豊中市待兼山1の1（〒560）　☎ 06（856）1151　内線2138